

「新型コロナウイルス」に揺れた2020年でした。本来なら、夏に行われるはずだった東京五輪・パラリンピックも来年に延期。それどころか、春先から増えだした感染者のために政府は4月に入ると「緊急事態宣言」を発令し、新学期の授業も学校行事もストップしてしまいました。普段、学校に通い、長い夏休みが楽しいはずの学生生活は全く違うものになってしまったのではないのでしょうか。いろんな計画や予定が狂ってしまった1年でした。

今回の論説文のテーマは、そういう時代背景を反映して「あなたにとっての理想的な『時間』の在り方とは何ですか？」としました。今年ほど、1日＝24時間という時間の使い方を考えさせられたことはなかったでしょう。身近なテーマであったためか、応募作品数も例年以上で、かつ、実際に経験したエピソードを盛り込んだ、今年らしい作品が多数寄せられました。審査員泣かせの当たり年でした。

その中で頭一つ抜けて優秀賞に輝いたのが「人と触れ合う時間」です。大きく変化した生活の中で「今までになかった時間」が生まれ、それによって弟と一緒に遊んだり、ピアノの連弾をしたりすることができた——と言う経験をもとに、分かりやすい言葉で家族とのかかわりをまとめました。人生は限られた時間の中にある。そのことを忘れずに「成長するために多くの人とのかかわり、新しい世界が広げられるような時間の過ごし方をしたい」とまとめました。身近な経験から気付いた、明確な主張です。欲を言えば、弟との年齢差が知りたかった。これまでの兄弟に関するエピソードがもう少しあったら、2人の距離が接近したことへの喜びがより説得力を持って伝わったことでしょう。

奨励賞には「時間の使い道」と「自粛生活が教えてくれたこと」が選ばれました。「時間の使い道」は論説文として読ませる工夫に充ちていました。冒頭で「私は時間を無駄に使うのが嫌いだ」と断言して、読み手をドキッとさせます。最初の段落で「無駄な時間とは本当に存在するのだろうか」と問いを投げかけ、次の段落から最近の体験を具体的に紹介しながら、イライラしている自分に「なぜこんなにいら立っているのだろうか？」と疑問を持ちます。この、心が変わった瞬間がポイントですね。「時には息抜きも重要だ」と思いながら「すべてが無駄だったわけではない」。もう一度、「私は時間を無駄に使うのが嫌いだ」とリフレインしますが、明らかに心は変化しています。なかなかうまく運びです。欲を言えば、心が変わった理由をもう少し丁寧に書けば、より説得力があったでしょう。

「自粛生活が教えてくれたこと」は、まさに「新型コロナの影響で自粛要請が出たことによって、今まで足りなかった時間があるようになった」。その時間を使ってお菓子作りをしたり、大掃除をしたり、友達と長電話したりする一方で、「将来について考えるようになった」という自分の変化をまとめたものです。追いかけるばかりだった時間に余裕ができたことで、「未来のことを考える」ようになった。最後は「これからの時間や人生を

作っていきたい」と決意をまとめています。もう少し、この変化を生み出した経験を丁寧に、詳しく書いていけば、より説得力が高まったことでしょう。

もう一点、力作だったのが佳作の「僕に与えられた『時間』」です。筆者は中一だけに、小学校を卒業して夢いっぱいに進んだ中学校の新生活がコロナで大きく変わったことの戸惑いが、よく伝わってきます。これまで「当たり前」と思っていた時間や、普通の生活をおくることが「すごくありがたい」と思う感情は共感できます。まだまだ文章の流れやまとめ方に課題はありますが、まずは自分の思いや考えを、体験を通して書いてみることで、来年以降が期待できますね。

上位に残った他の作品もいい内容でしたが、中には情感がかりが強すぎたり、「こう思う」「こう感じた」というような程度で終わったりする、感想文のような内容のものもありました。また、話の題材は面白いのですが、「なぜ、今なのか」が抜けていたものもありました。出題文をよく読んでください。「最近の時間の過ごし方を踏まえたうえで」という一文があります。当然、出題者が求めている「最近の例」がないと、十分に答えた内容とはいえません。昨年でも、来年でも、書ける内容ではなく、「今年しか書けない内容」を書かないと、出題者の求めに応じているとは言えませんね。

まずは課題の文章をしっかりと読み、出題者が何を求めているのか、を把握すること。論説文の基本はそこから始まります。面白い話で文章をまとめた感想文やエッセイとの違いは、そこです。注意深く出題者の意図を読んだうえで、体験を通して自分の考えや意見を論理的にまとめる。それが読みやすく、すっきりした論説文なのです。